

論文審査の要旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

栞田 真吾

主論文の題目
および
掲載誌・審査委員

題目 Impact of Body Mass Index on C-reactive Protein and Brain Natriuretic Peptide Levels and Adverse Outcomes after Diagnostic Coronary Artery Angiography

(肥満度指数が予後と BNP 値と炎症に与える影響)

掲載誌 Japanese Journal of Clinical Physiology, 2015, 45 :159-164

主査 武者 春樹

副査 信岡 祐彦

副査 高田 礼子

[論文の要旨・価値]

肥満は冠動脈疾患(CAD)の危険因子であり、適正な体重減少はCAD発症リスクを軽減させる一方で、肥満のある心疾患患者の長期予後が良いという報告がある。本研究(聖マリアンナ医科大学生命倫理委員会承認3107号)は、CADが疑われ心臓カテーテル検査(CAG)を施行した患者における肥満度指数(BMI)が予後に与える影響を明らかにすることを目的とした。CAGレポート計1095例より画質解析不良例(15例)、左室駆出率50%以下の例(297例)を除外し、計783例を後ろ向きに解析した(平均追跡期間3.1年)。全死亡、心不全入院、心筋梗塞の発症、冠動脈血行再建術の施行を心臓血管死複合イベント(発生74人)として解析した。患者特性としては、BMIが高い程年齢が低く、高血圧・糖尿病・喫煙歴が多く、BNPは低い傾向であった。フラミンガムリスクスコア(FRS)と左室駆出率に差はなかった。Cox回帰分析による心血管死複合イベントのハザード比は正常BMI群に比し低BMI群が2.53倍と高く、overweight群0.62倍、obese群0.61倍であった。BMIとLogハザード比の関係はJ型を示した。BMIは、FRSおよびCRPと正の相関関係、BNPと負の相関関係を示した(多変量線形回帰分析)。以上より、CAD疑いにてCAGを施行した患者においても心血管死複合イベントにおけるobesity paradoxの存在を明らかにした価値ある論文である。

[審査概要]

学位審査は、主査、副査、明石教授陪席のもとで行われ、約20分間のプレゼンテーションの後質疑応答を行った。プレゼンテーションは明解で分かり易く、ポイントを押さえたものであった。質問は多岐に亘り、死亡原因に関して、心不全の定義に関する疑問、アルブミン、タンパク、栄養に関して、冠動脈病変との関連など誠実に適切な回答であった。本研究の限界も良く理解しており、今後の研究の展開についても前向きな姿勢が示された。

最終試験結果の要旨

[研究能力・専門的学識・外国語(英語)試験等の評価]

外国語試験は、引用文献の中の最新のものを用い評価した。高いプレゼンテーション能力、研究に対するまじめな考え方、落ち着いた礼儀正しい態度であり、学位授与に値すると判断した。